

オヤジと

冷やし中華と漁師町

八瀬永太郎

小さな想い出をひとつ。

オヤジと

冷やし中華と漁師町

命を繋ぐ母の愛と絆

木々バロ

夏の盛りだったよね。

俺が、まだ小さい頃だよ。

なんでだったか思い出せないけれど、オヤジと車で出かけた。二人だけで出かけたのは、初めてだったはずだよ。

あの日も暑かったね。

陽に焼けたシートで、ヤケドしそうだった。

そういえば、オヤジは南の事を下（シモ）と言ってたね。海沿いの道を下りながら、何か話したっけ？

入り組んだ漁師町を抜けて着いた先は、ちよつと寂れた感じの工場。オヤジが、商売で付き合っているところだったよね。恰幅のいい人と親しげに挨拶して、「うちの末っ子じゃ」と、俺の頭を乱暴に撫でたっけ。

ちよつど昼時で、事務をしている奥さんが、冷やし中

華を取ってくれたね。冷やし中華を食べたのは、それが生まれて初めてだった。

あんまり美味くて、びっくりしたよ。

甘酸っぱいツユに練りカラシが利いて、とにかく美味かった。なにより、暑い日にはぴったりだったしね。

ただそれだけの一日だったから、オヤジはとっくに忘

れているだろうけど、俺は本当によく憶えているよ。  
遊園地に行ったのでもないし、特に何かを話した記憶  
もない。だから、楽しかった思い出というわけじゃない。

けど、ずっと忘れられないんだ。

そういえば、二人だけで出かけたのは、あれっきりだ  
っけ。



冷やし中華を食べると、今も思い出してしまおう。  
潮の香りがする漁師町と、オヤジの陽に焼けた顔を  
ね。

今度帰ったら、そんな昔の話でもしようか。

なあ、だから元気でいてくれよ。

# オヤジと冷やし中華と漁師の町

著者・八瀬永太郎

2011年12月15日